

氏名	小林 久子	(学籍番号 16DN05)
学位の種類	博士(看護学)	
学位記番号	25号	
学位授与年月日	2021年9月24日	
論文題目	心臓ペースメーカー植込み術直後から2ヶ月における生活体験とペースメーカー植込みにまつわる体験の変化に関する研究	
論文審査担当者	委員長	鶴田 恵子 教授
	委員	藤本 栄子 教授
	委員	大石 ふみ子 教授
	委員	新宮 尚人 教授
	委員	久保田 君枝 教授

論文要旨

I. 研究の背景

恒久的心臓ペースメーカー (Cardiac Pacemaker, 以下、Pm と記す) 植込み治療は、徐脈性不整脈の唯一の治療法であり、治療目的は生命予後の改善、不整脈に基づく症状の改善、患者の社会生活上の満足度の改善にある。Pm 植込み後の患者は、徐脈になる以前の生活活動を取り戻すことができる。一方、患者の身体的負担は合併症、機器への違和感や身体症状、生活制限の煩わしさがある。心理面では機器に命を操られる不安感やボディ・イメージの低下があり、社会面では、楽しみの制限や人間関係、社会活動の負担がある。患者にとって症状の改善と生活の質の改善が十分に得られていないことは大きな問題であるが、看護師の指導は教育的支援が中心で、情緒的支援や認知的支援の具体的なケアは示されてこなかった。そこで、今回の研究は、Pm 植込みを行った患者が日々の生活と Pm に対してどのような体験をしているかについて明らかにし、Pm を植込んだ患者が治療を乗り越え、生活を取り戻していくことを支える援助について検討したい。

II. 研究目的

本研究は、Pm 植込み術直後から2ヶ月において、Pm 植込みを行った患者が日々の生活と Pm に対してどのような体験をしているかについて明らかにし、Pm を植込んだ患者が治療を乗り越え、生活を取り戻していくことを支える援助について検討するものとする。

III. 研究方法

研究対象者は、初回に Pm 植込み術を受けた 40 歳以上の男女で心不全判定 NYHA II 度以下の自立して生活している人とし、Pm 植込み術直後と 2 ヶ月後の時期に、徐脈症状と生活状況の変化、尺度調査 (日本語版ソーシャル・サポート、日本版 GHQ28[®])、Pm 術後の身体的苦痛、生活体験、Pm 植込みにまつわる体験について面接調査と質問紙調査を実施した。徐脈症状と生活状況の変化は面接と質問紙調査から関連情報を抽出し、変化を判定した。尺度については記述統計を行い、身体的苦痛については面接データの内容分析 (Berelson B) を行った。生活体験と Pm にまつわる体験については、質的帰納的分析を行った。

IV. 結果

1. 研究対象者の概要

最終の分析対象者は15名（男性8名、女性7名）、年齢層は40～80歳代で7名が就業し、既婚14名、未婚1名であった。平均調査時点はPm植込み術直後においては術後2.3日、2ヶ月後においては術後57日であった。

2. 徐脈症状と生活状況の変化

研究対象者は、Pm植込み以前において15名中12名が息切れ、動悸、めまい、意識消失、眼前暗黒感、易疲労感などの徐脈症状を抱えていた。Pm植込み2ヶ月後には全員の徐脈症状が消失し、徐脈症状により生活が縮小していた7名においては、生活が拡大していた。

3. 生活体験

Pm植込み術直後の体験については、56のコードから6つのサブカテゴリが得られ、これらから【Pmを入れた体でどのような生活活動ができるか不安】【人との関係性が不安】【Pmとともに安全に暮らすための知識を身につけたい】、という3つのカテゴリが明らかになった。

Pm植込み2か月後の体験については、164のコードから7つのサブカテゴリが得られ、これらから【症状の改善により元の生活が可能になる】【趣味や楽しみの追及を再開する】【Pmを大切に長く生き続けたい】、という3つのカテゴリが明らかになった。

4. Pm植込みにまつわる体験

Pm植込み術直後の体験については、117のコードから25のサブカテゴリ、11のカテゴリが得られ、これらから【Pmによって生かされている実感】【Pmによって自分が変わることへの受け入れがたさ】【長い目で見てPm治療に問題が出現することへの不安】【Pmを入れた現実を受け入れて前を向こうという思い】、という4つの大カテゴリが明らかになった。

Pm植込み2か月後の体験については、73のコードから21のサブカテゴリ、11のカテゴリが得られ、これらから【葛藤しつつのPmの受け入れ】【Pmが自身の身体や生活になじみつつあるという感覚の芽生え】【Pmを入れたことにより身体・心理・社会の広範囲に生じた変化に対して感じる違和感と戸惑い】【Pmと共に生きることを感謝とともに受け入れて描く展望】、という4つの大カテゴリが明らかになった。

V. 考察

Pm植込み術直後の生活体験とPm植込みにまつわる体験において、Pmに助けられ楽になったという体験と、Pmは異様で受け入れられないという相反する体験が特徴であった。この直接的な身体感覚は、患者にとって全く新しいものであった。次に、これを受けて患者はPm治療に問題が出現することへの不安を抱く体験をしていた。患者の葛藤や不安を理解し、変化への気づきとセルフモニタリングを促し、思いを引き出す看護師の関わりが必要ではないかと考える。

Pm植込み2か月後の生活体験とPm植込みにまつわる体験については、徐脈症状が消失して、患者は徐脈以前の生活を取り戻し、楽しみを見出す体験が特徴であった。これを受けて患者は、Pmを大切に長く生きたいという思いと、Pmを受け入れることの葛藤や退院後に身体心理社会面にわたっての戸惑いがあり、肯定的・否定的な思いが混在していた。葛藤が持続する患者に対しては、傾聴・相談や戸惑いへ

の対処方法の提供が必要と考える。

VI. 結論

Pm 植込み術直後の患者の体験の特徴は、Pm を植込んだ身体感覚に始まり、Pm によって生かされているという事実と Pm という異物の受け入れがたさという対立を含む感覚であった。Pm 植込み 2 ヶ月後の体験の特徴は、徐脈症状の消失により元の生活を取り戻して楽しみを見出すことに始まった Pm と共に生きる思いと、Pm 受け入れの葛藤の持続や退院後の戸惑いの対立が続いた。このことから、患者の状況を理解して、継続的看護が必要であることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、ペースメーカー（以下 Pm）植え込み術が普及され、術後の患者が徐脈の症状は改善するものの、身体心理社会面の負担について、術直後と2ヶ月後に、臨床経験豊かな著者がデータを収集して分析を行ない、生活体験と Pm 植え込みにまつわる体験を統合して分析した結果はオリジナリティがある。

結果では、Pm 植込み術直後の患者の体験の特徴は、Pm を植込んだ身体感覚にはじまり、Pm によって生かされているという事実と Pm という異物の受け入れがたさという対立を含む感覚であった。2ヶ月後の体験の特徴は、徐脈症状の消失により元の生活を取り戻して楽しみにはじまり、Pm と共に生きる思いと、Pm 受け入れの葛藤の持続や退院後の戸惑いの対立が存在したことが明らかになった。

考察では、Pm 植え込み患者には葛藤や不安を理解し、変化への気づきとセルフモニタリングを促し、思いを引き出す看護師の関わり的重要性を明らかにしているため、看護支援プログラムの開発に向けた著者の研究継続を期待できる。

分析方法を洗練して既存データの分析を再度行ない、本論文を完成させた努力を評価する。

以上の結果から、本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認められた。